

〔巻頭言〕

二つの段階の目覚めを！

日本家族看護学会理事長（千葉県立保健医療大学）

石垣 和子

このところ、看護師の役割についての看護界の世論が大きく動いており、役割を拡大する方向での見直し論議が盛んになっている。何につけても急速なグローバル化が進む日本の現在であるが、看護界においても北米発信を基軸としたグローバル化の動きは好むと好まざるとにかかわらず止めることはできないことを考えると、現在の揺さぶりは日本家族看護学会に対しても目を覚ませと教えてくれているように感じられる。

本学会は、会員数では数ある看護系の学会の中でも中堅どころであるが、まだまだ核となる学問的な基盤は整っていないと感じている。学会員の活動舞台として、もう一つ、あるいはそれ以上の数の他の学会を常に置いている学会員が多く、日本家族看護学会がメインの活動場所という会員がどれほどいるのであろうか。

日本では、昔から領域ごとに家族看護実践が当たり前に行われてきたという実績からすると、領域別の看護学の中にすでに存在するではないか、外出しする必要はない、と考える家族看護内包論者が多数派を占め、やって当たり前であるので特に騒ぐこともないという全体的な雰囲気時代の時代が長く続いたことも当然と思われる。しかし、日本家族看護学会に集まるものの多くは、そうではなくて固有の専門性をもっと高めて知識体系にし、家族看護実践との円環的關係により理論と実践の双方が向上するのであると考えている。従って、家族看護内包論者的な考えに対して、以前から領域横断的な家族看護実践や新領域としての家族看護学に目覚めた（含：目覚めたい）研究者・教育者・実践者が、この学会に集まっ

ている。しかし新入会員も多ければ退会する会員も少なくはないという落ち着いた層が本学会には常にあり、これまで本学会は、家族看護の専門性に関するエヴェデンスを伴う明確なつきつけを内包論に対して示して、家族看護そのものを専門とする研究者・教育者・実践者を育てたいと願ってきた。すなわち、“第1段階の目覚め”をもっとクリアにしたものであると考えている。

このところの看護界の動きは、それに上乘せとなる“第2段階の目覚め”を突き付けている。次のような点はどうか。たとえば、家族看護実践現場で役割の限界を感じることはどのようなことか、役割拡大によって解決しそうな問題は何でありその場合の役割とはどのような役割か、今までは裁量を与えられていなかった行為のうち、どのような行為に対する裁量が増えれば（行政解釈が変われば）実践がもっとたやすく行えるのか、受け手に喜んでもらえるのか。また、これらの点について日ごろどの程度感じながら仕事をしてきたか、アイデアを求められた際にすぐ提出できるか、それともこの機会に家族看護の枠組みを大きく変換するという考えに挑戦してみるか、などである。実践事例の省察とブレイクスルーするようなアイデアに“目覚める”必要性があるのではないか。

このように、“目覚めるということ”，それには常に覚醒した頭で物事に対すること、これが大事なことだと考えている。幸い国際家族看護学会が京都で1年後に開催される。国際的な観点からの議論の渦が生まれれば、嫌でも一人ひとりの頭は覚醒し、楽しい未来が開けるものと期待している。